
2023年度 第5期 311ゼミナール 南あわじ市ユース防災プロジェクト 活動報告書



メンバー

4年生 柴田敬介 佐藤夏美

3年生 猪狩光希 小野崎彩菜 村上真綺 和田穂乃香

目次

- 1 活動計画
- 2 活動内容
- 3 総括
- 4 各自の感想

1. 活動概要

○企画

兵庫県南あわじ市教育委員会が2023年度、「学ぶ楽しさ支援センター」開所記念事業として、連携する高校・大学とともに新たな防災教育の発信を目指す「ユース防災プロジェクト」を企画。連携協定を結ぶ宮城教育大学にも参加要請があり、兵庫教育大学、鳴門教育大学、兵庫県立舞子高校、淡路三原高校とともに共催団体として参加した。311ゼミナールの中から有志のゼミ生6名が、他大学・高校の学生生徒とともに実行委に入り、2022年度から検討を続け、2023年8月の防災交流イベントに臨んだ。実行委員メンバーと参加者は以下の通り。

- ・南あわじ市教育委員会
- ・実行委員
 - 兵庫教育大学（3名）
 - 鳴門教育大学（5名）
 - 宮城教育大学（6名）
 - 舞子高校（4名）
 - 淡路三原高校（5名）
- ・参加者
 - 洲本実業高校（1名）
 - 鳴門渦潮高校（6名）
 - 鳴門高校（2名）
 - 南あわじ市の小学生（10名）
 - 南あわじ市の中学生（4名）

○防災交流イベント

令和5年8月21日（月）～8月23日（水）

会場：北淡震災記念公園野島断層保存館、国立淡路青少年交流の家

【1日目】8月21日（月）

- ・開講式
- ・我が町紹介（淡路三原高校）
- ・語り部の話（米山まさゆきさん）
- ・asariさんの歌
- ・防災すごろく（鳴門教育大学）
- ・避難所運営ワークショップ（齋藤幸男先生）

【2日目】8月22日（火）

- ・選択型ワークショップ
 - ・障害者、高齢者に対する防災（宮城教育大学）
 - ・避難所での子どもたちの遊び（舞子高校）
 - ・観光客向けの防災マップ作り（兵庫教育大学）
- ・「市長へ提言」作成
- ・防災リュック交流（鳴門教育大学）
- ・防災非常食づくり（鳴門教育大学）

- ・市長へ提言

【3日目】8月23日（水）

- ・語り部の話（佐藤敏郎先生）
- ・提言まとめ
- ・危機管理課へ最終提言
- ・閉講式

2. 活動内容

【1日目】8月21日（月）

北淡震災記念公園にて、開講式と淡路三原高校の司会進行によるアイスブレイクが行われた。米山さんの講演では小学生から大学生混合の5人グループに分かれ、講話で「分かった」ことをピンクの付箋、「疑問」に思ったことを青の付箋にメモしておき、そのグループで付箋をもとに意見交換をした。

◇米山正幸さんの講話

現在北淡震災記念公園総支配人、阪神淡路大震災の語り部として活躍しており、震災当時は淡路島の消防団員であった。

● 震災当時の淡路島について

淡路島では震災当日の夕方には行方不明者が0人になり、即死者以外全員救出することができた。

→当時の地域の強いつながりがその結果をもたらした。「あの家のおじいちゃんは1階のどこに寝ているからこの辺にいるかもしれない」のように、消防団の人や住民同士は近所の人々の情報をよく知っていた。消防団員が多かったことも理由の一つ。

3700あった家屋のうち3300の家屋が被害（数字は書いてあったけどそれがどの程度の被害だったか全壊なのかわからない）

● 地震発生時と避難生活について

震源は浅く、縦揺れが大きいことを覚えている。揺れの長さは40秒ほどで、あまり知られていないが津波も数cmあった。

地震が起きた時の衝撃は、家にダンプがぶつかったのではないかと、飛行機が落ちてきたのではないかと思うくらいで、家の中はぐちゃぐちゃになり、ドアが歪んで開かなくなりました。消防団員として仕事をしている中、近所の人から実家がつぶれていると言われた。

「火出したら終いや」という思いの中活動をし、避難所で他人と寝るより傾いた自分の家で寝る方がいいと言う住民たちに避難所に行ってくれと頼んでまわった

震災後1日半、2日くらいは助けあおうという意識が強かったけれども、それ以降は自分優先になる人が出てきて、避難所では文句や喧嘩が増え、次第に仕切りも増えていった。

災害では人の温かさが見えると同時に、嫌な部分も見えた。

米山さんは赤ちゃんが生まれたばかりで、1月20日にお宮参りの予定だった。しかし、米山さん自身は「大変な時なのにお宮参りは嫌や」と言っていた。それでも、近所の人がお宮参りしたらいいと言ってお宮参りすることになり、神主さんが避難所に来てくれてお祝いしてくれた。

- 地震火災について

阪神淡路大震災の死者6434人中約500人が焼死で、淡路島では小学校の理科室のぼやと、一軒の火事が発生した。地震発生時は、消火栓を新しいシステムに変えたばかりで水を出すことができなかった。被災者の中には、火を止めることができず自分の手の届くところでお母さんが亡くなってしまい、お父さんはノイローゼになってしまった方もいる。

- 防災グッズについて

- ・突っ張り棒は天井を突き破ることもあるから一長一短
- ・たんすが倒れたその隙間によって助かった人もいる
- ・ガラスのフィルムは10年で替える
- ・足を怪我したら逃げられないからスリッパ必須
- ・生き埋めになっても声を出せなかったり、ヘリの音で声が聞こえなかったりしたから、笛必須で、笛はあるだけじゃだめ。枕元に置いているけど、紐とかで留めておかないと意味がない
- ・車中泊を短期間可能にしたりできるからガソリンは常に満タンにしておく
- ・防災情報を知っておくこと

- 支援・ボランティアについて

- ・支援物資は置き場所に困り、置くところを作るため工事をするほど四国から救援物資が届く
- ・衣類のなかに食料が入っていて食料をだめにしたこともあるので、支援物資届ける時は衣類と食料を分けて送ると避難所でとても助かる
- ・神戸の方は食料にも困っていたのに対し、淡路島にはたくさん食料が届いた。
- ・お風呂を提供してくれるなど、自衛隊のマンパワーに助けられた
- ・外から来る人の力が必要。ボランティアも若い人がたくさん来た一方、被災者が自分でできることもボランティアがやってしまい、甘えてしまったので、ボランティアは何でもかんでも手伝うのではなく、被災者の自立を支援することが大切になる。避難所はゴールではない。

- 現在の様子

今は道が広がる等、ハード面では防災に強い島になったが、その距離が住民同士の付き合いを希薄にしており、今は寝ている位置もわからないし、震災当時ほどの地域のつながりがない。だからこそ、避難訓練の継続をして住民同士が顔を合わせる機会を作ることが大切。

◇北淡震災祈念公園野島断層保存館見学

米山さんの講話を聞いた後、グループごとに北淡震災記念公園野島断層保存館を見学した。

展示内容

野島断層(国指定天然記念物)、震災直後の部屋の様子、家屋の傾きの再現、断層のジオラマによる説明や、阪神淡路大震災についてのパネル展示、阪神淡路大震災についての動画→展示が黄ばんでいたり、展示の一部が壊れたりして老朽化が進んでいる。

◇防災すごろく（鳴門教育大学）

国立淡路青少年交流の家に移動し、asariさんの歌を聴いた後、鳴門教育大学の司会進行で防災すごろくを実施した。語り部の米山さんの話を聞いた時と同じグループで活動した。

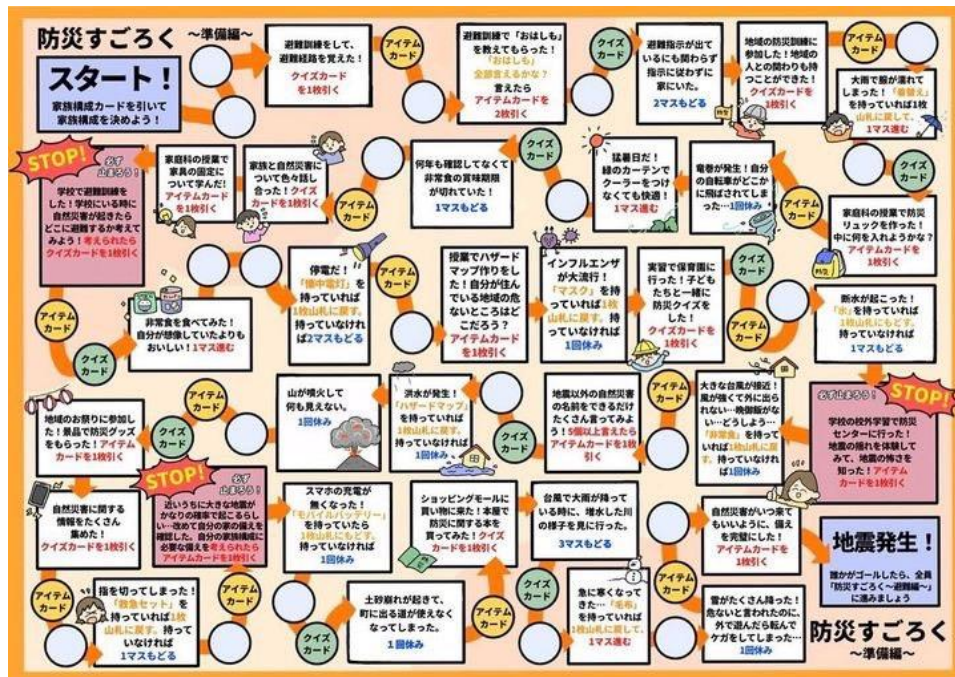
防災すごろくは、鳴門教育大学の学生（2022年度卒業生）が卒業論文に関する研究で作成したものを今回、本プロジェクトに参加した鳴門教育大学の学生が一部アレンジを加えて実施している。

～防災すごろくの内容～

- ・すごろく(表が「準備編」裏が「避難編」)、さいころ、アイテムカード、クイズカード、クイズカード解説書、家族構成カード
- ・アイテムカード…「マスク」「ヘルメット」「着替え」「水」「非常食」など避難する時に役に立つかもしれないアイテムが書かれている。
- ・クイズカード…「日本では地震の揺れの強さを何段階で表しているか」など災害に関する知識を問うクイズ。正解したらアイテムカードを引くことができる。クイズカードの解説書が配られており、それを見て正誤を確かめる。
- ・家族構成カード…すごろくを始める前に1人1枚配られる。すごろくではその家族の一員という設定で進行する。「高齢者がいる家族」「乳児がいる家族」「ペットがいる家族」の3つ。

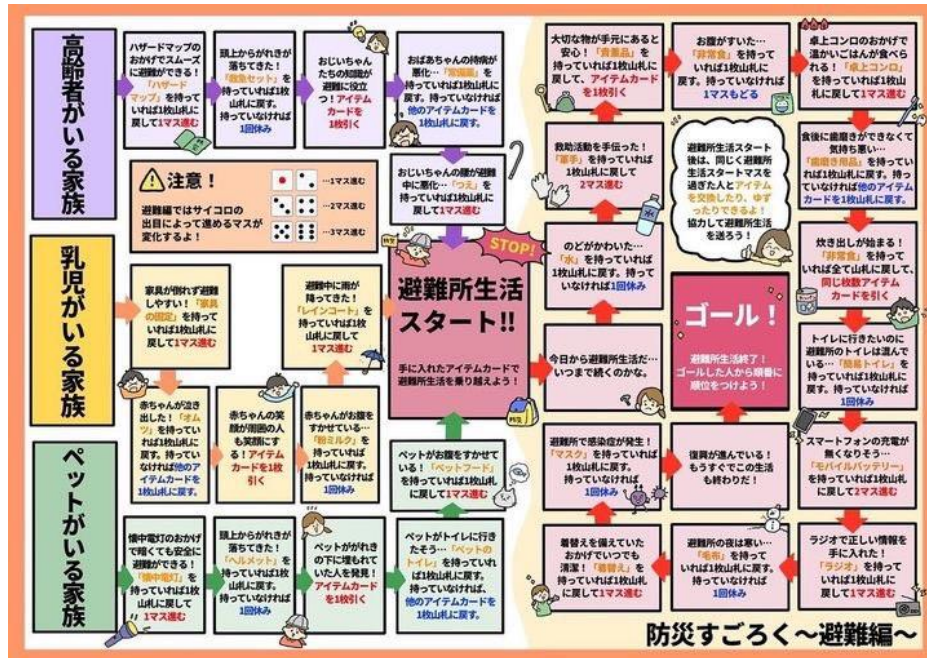
すごろく(準備編)の紹介

- ・災害が起こる前の出来事が起こる
- ・「何年も確認してなくて非常食の賞味期限が切れていた！1マスもどる」など
- ・「アイテムカード」「クイズカード」のマスがありそこに止まると、アイテムカードまたはクイズカードを引く
- ・「STOP!」のマスでは必ず止まらなくてはならない。「学校にいる時に自然災害が起きたらどこに避難するか考えてみよう!」など



すごろく(避難編)の紹介

- ・災害が起きた後、避難するまでや避難所での生活についての出来事が起こる
- ・最初に配られた家族構成カードによってスタート位置が変わる
- ・準備編でゲットした「アイテムカード」を使う場面が出てくる
- ・「スマートフォンの充電が無くなりそう…「モバイルバッテリー」を持っていれば1マス進む」など
- ・避難所生活スタート後は持っているアイテムカードを他の人と交換したり譲ったりすることができる



活動を通して、小学生も大学生も年齢関係なく楽しめるうえに、クイズカードによって災害についての知識が得られるすごろくは一石二鳥の学習教材だと考える。しかし、すごろくのコマをよくよく見ると「こういう時はこうしよう」と思考が固定されてしまう危うさがある可能性も感じたためあくまでも一例ということも補足する必要があると考える。立場（乳児がいる等）に合わせて足りないカード（避難先で必要になるもの）を貸し借りすることは、災害時の助け合いを擬似的に学ぶことができ、その大切さを実感しやすいメリットがあると感じた。

◇避難所運営ワークショップ（齋藤幸男先生）

夕食後、齋藤先生による避難所運営についてのワークショップが行われた。ここまでのグループとは異なり、小中学生、高校生が混ざったグループが4つ、大学生のみのグループが2つによる活動となった。

避難所運営時に実際にあった出来事を寸劇で再現したり、班ごとに自分たちで避難所運営の組織図を書くなど実践的なワークショップになった。グループ分けで学校種ごとに分けられていたため年齢に応じた考えがたくさん出てとても活発な活動になっており、時には小学生が大学生よりも優れた考えを出す場面があり、講話の中で齋藤先生が避難所運営では大人よりも高校生が活躍していたというお話もあり、子どものパワーを実感すると同時に子どもの

良さを引き出しながら、大学生としてどのような行動をするべきなのかを考える機会になった。

【2日目】8月22日（火）

◇選択型ワークショップ

二日目の最初の活動は、宮城教育大学は高齢者・障害者に対する防災、舞子高校は避難所での子どもたちの遊び、兵庫教育大学は観光客向けの防災マップ作りをテーマとしワークショップを行った。

○宮城教育大学ワークショップ(一部抜粋)

① はじめに

東日本大震災について伝え、南海トラフ地震で南あわじ市では最大8.1mの津波が想定されていることを確認した。ちょうど交流の家の国旗掲揚塔と同じくらいの高さであったため、全員でイメージを共有することができた。

② ロールプレイ

災害弱者とはどんな人が挙げられるか確認した。つづいて「津波から避難している時にこんな人に出会った、どうする？」という状況設定のもと、高齢者・けが人・子どもに出会ったらそれぞれどう対応するか、3グループに分かれてロールプレイをした。

ある小学生チームは「わしはもう歳だから動かん！」と言ったおじいさん役に対し誰かに助けを求めようと判断し、WSを後ろで参観していた南あわじ市の教育長を連れてきておじいさんを説得させた。

Miyagi University of Education

南海トラフ地震


兵庫県内の
最高津波水位
南あわじ市
8.1m




Miyagi University of Education

Q.災害が起こった時に自分の力だけで 避難できない人はどんな人か

- ・高齢者
- ・小さい子供
- ・妊婦




⇒災害弱者




Miyagi University of Education

- 性別: 男性
- 年齢: 80歳くらい
- 特徴: 杖を突いて腰が曲がっている。
逃げる気配がない




「一緒に逃げましょう！」
『どうせもうすぐに死ぬんだから、逃げて意味がない！！ここで死ぬんだ！』




Miyagi University of Education

- 性別: 男性
- 年齢: 20歳くらい
- 特徴: 塀の下敷きになっていて動けない
足をけがして歩いて歩けない




⇒ブロックを友達と一緒にどかしてあげた。
『ありがとうございます。助かりました。』
『もう少しで津波が来ます。一緒に逃げましょう。』
『私は足をけがして動けません。二人は先に避難してください。』




Miyagi University of Education

- 性別: 女子
- 年齢: 6歳(小学校1年生)
- 特徴: お母さんを探して泣きわめいている
周りの声が聞こえない程のパニック状態



「一緒に逃げよう」
『おかあさーん』




Miyagi University of Education

他の人を助けているうちに
自分もつなみにまきこまれてしまう

まだ家族がいるかもしれな
いと思い、家に帰っている
ときに自分もつなみにまき
こまれてしまう

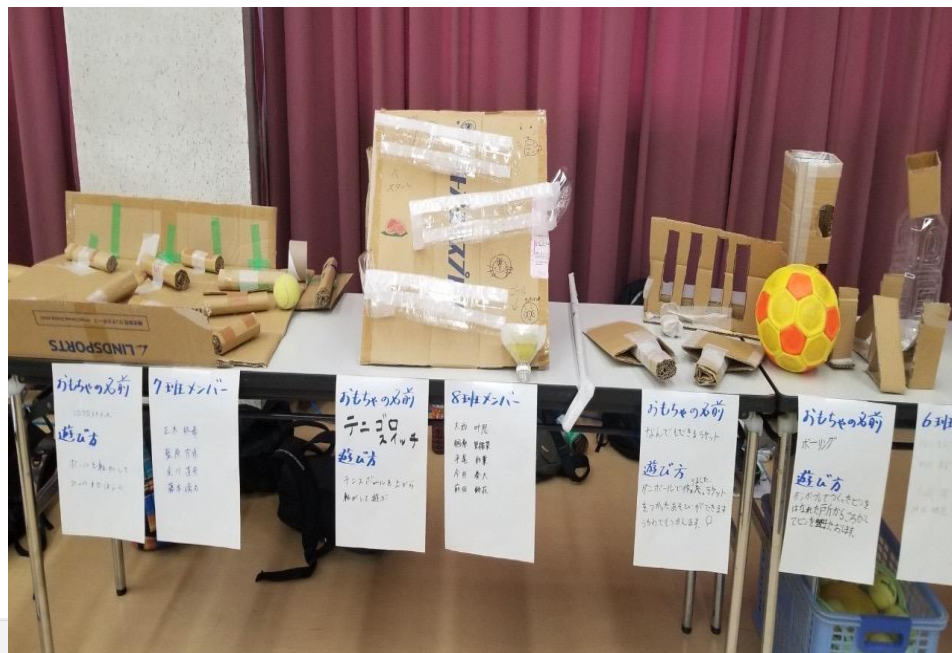
→だれかと「いっしょに」よりも「すぐに」が
大事



③ てんでんこについて

最後に、津波てんでんこについての説明をした。ロールプレイでは「助けたい」という意見が多かったが、それを優先したら危険が伴うという観点も示し、自分の命は自分で守ることを伝えた。

○避難所での子どもたちの遊び（舞子高校）



考えてほしいこと

- 小学校にある道具で何を使うか
- 小学校のどこで遊ぶのか
- 対象年齢

避難所での子どもたちの遊び



避難所とは ➡ 災害があったときに長い期間生活をする場所
*東日本大震災で大きな被害を受けた宮城県では最長6か月間避難所が開設されていました。
<今回の想定>
南海トラフ巨大地震による地震が発生
広田小学校に避難 *最大震度6強、津波は来ない想定
広田小学校に避難所が開設、小さい子からお年寄りまでたくさんいる(みんなで共同生活)
<避難所での子どもたち>
*子どもたちにとって学校はどんな場所?
*避難所生活でのストレス
*遊ぶことの重要性
<考えてみよう>

1. 避難所でどのような遊びができる?

例:本を読む

2. 避難所で使える材料でどんなおもちゃを作る?

例:ペットボトルでけん玉

キリトリ

感想

小・中・高・大

- ・避難所にいる子どもたちが退屈しないように避難所にあるものでおもちゃを作る。
- ・音は出ないかな?みんなが楽しく遊べるかな?考えることが沢山ある。

ワークショップ ～外国人観光客 向けの防災マッ プ作り～

兵庫教育大学

阿部真依 高篠慶子 堀内美咲



今日の流れ

1. 防災マップとは？
2. 外国人が防災マップについて困っていることを知ろう！
3. ALTや観光ガイドに困っていることを聞いてみよう！
4. 困っていることやどんな工夫が必要かまとめてみよう！

今日の流れ ～続き～

5. 実際に避難経路を歩いて防災マップに必要な情報を集めよう！
6. 集めた情報を使って私たちのオリジナルマップを作ろう！
7. 観光ガイドにこのマップを使って避難してもらおう！
8. マップの修正とまとめをしよう！

まとめ

外国人向けのマップに必要な情報は・・・

- ・ 写真
- ・ 中途半端な英単語は逆に混乱を招く
- ・ 行ったらダメなところを示すようなもの

- ・ 防災マップについての確認
- ・ 外国人は防災マップについてどんなことを知っていて、どんなことに困っているのか。
- ・ 誰でも使えるユニバーサルデザインの防災マップを作ってみる。
(フォーラム開催地の周辺を調査して情報を集める所から。)

◇防災リュック交流（鳴門教育大学）

ぼうさい 防災リュックの中身を見てみよう

() 班 名前

防災リュックチェックリスト

- | | |
|--|--------------------------------------|
| <input type="checkbox"/> 水 | <input type="checkbox"/> 軍手 |
| <input type="checkbox"/> 非常食 | <input type="checkbox"/> 洗面用具 |
| <input type="checkbox"/> 防災用ヘルメット、防災ずきん | <input type="checkbox"/> 歯ブラシ・歯磨き粉 |
| <input type="checkbox"/> 衣類・レインウェア | <input type="checkbox"/> タオル |
| <input type="checkbox"/> アルミホイルのシート | <input type="checkbox"/> ペン・ノート |
| <input type="checkbox"/> 懐中電灯（手動充電式が便利） | <input type="checkbox"/> 防犯ブザー・ホイッスル |
| <input type="checkbox"/> 携帯ラジオ（手動充電式が便利） | <input type="checkbox"/> お金（小銭） |
| <input type="checkbox"/> 予備電池・携帯充電器 | <input type="checkbox"/> マッチ・ろうそく |
| <input type="checkbox"/> 救急用品 | <input type="checkbox"/> 使い捨てカイロ |
| <input type="checkbox"/> （ばんそうこう、消毒液、包帯など） | <input type="checkbox"/> ブランケット |
| <input type="checkbox"/> 箸・スプーン・フォークなど | <input type="checkbox"/> 予備の下着・肌着 |
| <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| 一緒に持ち出すもの | |
| <input type="checkbox"/> いつも飲んでいる薬（あれば） | <input type="checkbox"/> 携帯電話 |
| <input type="checkbox"/> お薬手帳 | <input type="checkbox"/> 身分証明書 |

他の人のリュックの中にあつた真似したいもの

各自持ち寄つた防災リュックの中身を紹介し、自分や班員の防災リュックの中身をチェックシートで確認した。中身を共有した後、他の人のリュックにあつた真似したいものを挙げ、防災リュックに必要なものを班の中で話し合い防災リュックの重要性について確認できた。

◇防災非常食づくり（鳴門教育大学）

2日目の夕食は鳴門教育大学の企画で避難所でも食べられる料理ということで「さば缶カレー」と「フルーツポンチ」を作った。

★レシピ「さば缶カレー」★

1. 鍋にサラダ油を薄く広げ、木べらを使って中火で玉ねぎを炒める。



2. 玉ねぎが透き通ったら、じゃがいも・トマト缶・サバの水煮缶の汁（汁だけ！サバの身は入れない！）・水 600ml を加える。



3. 沸騰したらおたまでアクを取り、火を弱めて 15 分ほど煮込む。



4. サバの身を軽くほくほく鍋に加える。

5. ひと煮立ちしたら火を止め、カレーのルーをとかして混ぜる。

6. 弱火でとろみが出るまで煮込む。



7. 完成！！

★アルファ化米の作り方★

1. 袋を開け、プラスチックのスプーンを取り出す。



2. 沸騰したお湯を線まで入れ、袋の口を閉じ規定の時間待つ。

（火傷に注意！）



3. 出来上がった袋を開け（火傷に注意！）、お皿に必要な分だけ取り分ける



★フルーツポンチ★

1. フルーツ缶を開けボウルに入れる。

2. それぞれのフルーツを1口サイズに切る。



3. お皿にフルーツ缶のシロップとサイダーを1:3の割合で入れ、混ぜる。

4. 白玉を前に取りに来る！



5. フルーツと白玉を自分が食べれる分だけ取り、綺麗に盛り付けたら完成！！



◇市長へ提言

2日目の最後は、ここまでで学んだことを南あわじ市市長に提言するために小学生2グループ、中学生1グループ、高校生3グループ、大学生2グループに分かれて活動した。どのグループもまとめることはできたが、具体性がなくもっと南あわじ市にできること、してほしいことを明確にすることが課題に挙げられた。大学生グループの市長への提言資料を一部紹介する。

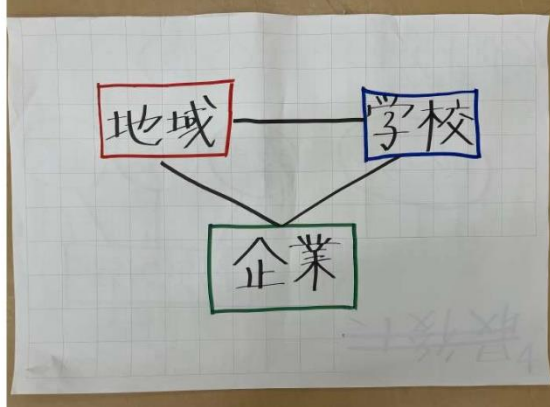
南あわじ市守本市長様
令和5年8月22日
ユース防災プロジェクト
大学生チーム ビジ班

提言書

課題 現在、南あわじ市では総合防災訓練というものがあり毎年メインの会場の地域を変えて行われている。
 (目標) 約10,000人!!
 コロナ禍後 参加者約5500人 / 人口約45,000人
 #地域の人の密なつながり #防災に触れる機会
 #防災を学ぶことを楽しむ

目的

総合防災訓練の参加率を上げるとともに、地域の人のつながりを強める機会を設けることで、総合防災訓練の質を高める。



学校

具体例

- ・メイン会場以外の学校の防災訓練を充実させる!!
- ・消防団と地域とのつながり
- ・応急処置、レスキュー (京都府避難訓練プログラムより)
- ・地域のことを熟知した消防団と子どもたちのつながり
- 各地域で受け継がれてきた知識を、次の世代に伝えていく (東本大震災被災者小グループより)

<強み>

- ・子供が主体的に参加できる。
- ・子供と大人の密接な関係がある。
- ・各地域の避難場所

地域

<強み>

- ・消防団と地域の人との関係が密にすることができる。
- ・大きな災害を経験した人が多く、防災に対する思いが強かったり、意識が高かったりする人が多い。
- ・伝統文化を受け継いでいる。

<具体例>

- ・消防団と地域住民が一緒に消火訓練などをする
- ・宮城・兵庫の震災経験者で当時のことを語り座談会
- ・防災に関する語り人 人形浄瑠璃

企業・団体

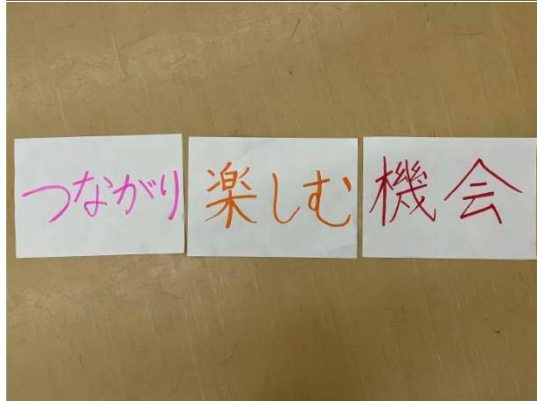
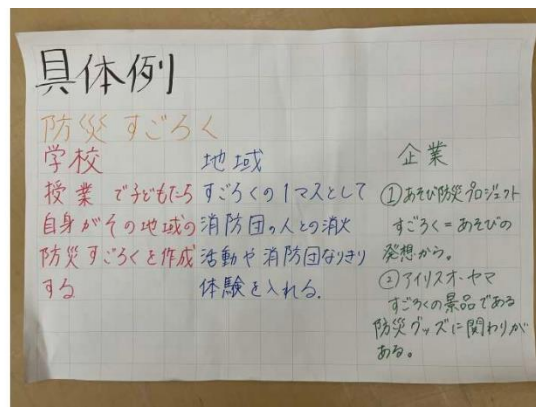
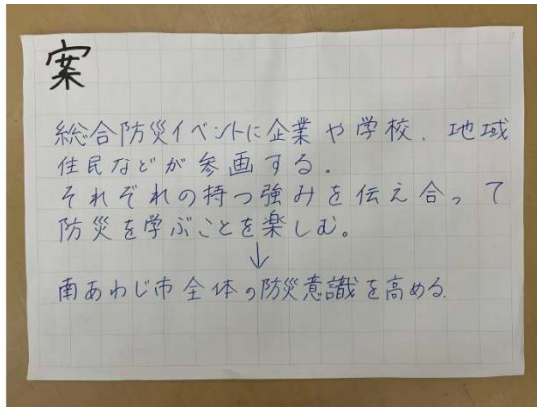
特徴

- ・その分野の有識者が集まっている。
- ・低年齢層の割合が少ない。
- ・分野外と関わりを持つ機会が少ない

具体例

- ① 大塚製菓(コロコロソフト)
- ② アリスオヤマ
- ③ (東日本震災と経験) 防災士による防災ゼミ
- ④ ひろい震災記念山世史(研究) (連続講座)
- ⑤ 防災士マエの会(避難所での巡回)
- ⑥ 淡路瓦 昭和産業株式会社 淡路瓦工業組合
- ⑦ あわじ防災プロジェクト

企業と教育学部の学生が事前打ち合わせを行うことで、子供も参加しやすくなるイベントになる。当日学生はアシスタントを行う。



【3日目】8月23日（水）

最終日は佐藤敏郎先生の講話からスタートした。佐藤敏郎の講話から学んだことを要点を絞ってまとめていく

◇佐藤敏郎先生の講話

● 当時の大川小

「津波が来るまで51分、山がある、スクールバスもある、無線もある、ラジオもある」
救える条件はあったのに救えなかったということは大川小の命は救えた命だった。
つまり、時間、情報、手段などが命を救うのではなくそれらを条件として使う「行動」が命を救うということである。

児童が山の方へ走ろうとしたら「並びなさい」と元の場所に戻された話や最後の一分で津波の方へ一列で向かった話、先生はきっと子どもを抱きしめたまま津波に巻き込まれたという話から「行動」にしないと悔しい思いをするという教訓を得ることができると思う。

震災遺構となった大川小学校だが、そこには助けたかった先生・避難される先生がいるがどの先生も恨んだことはなかった。恨むのではなく、掛け違えたボタンがなんだったのかを問う方が大切。

● 今の大川小

大川小は今、「あの大川小」といわれて、震災で有名になった「特別」な小学校

・・・本当にそうだろうか？

大川小も私たち・皆さんが通った母校のように「普通」の小学校だった。

そこには、笑顔・学び・色々な感情・思い出があった

だからこそ、自分にとっての「特別」の東日本大震災と考えたり、伝えたりするのではなく、他の人にとっての東日本大震災を知り、広く・俯瞰してみることが大切。

- 防災訓練のあり方

「予定調和の訓練はいらない」「リアルな伝え方をしなければならない」
そのために、登場人物に血を通わせ、みんな助かって喜ぶハッピーエンドまでを想定していかなければならない

- 避難マニュアルのあり方

マニュアルは命を守るものだからこそ、これで命を守れるのかどうかよく検討する必要がある。

災害時は情報と時間がないからこそ、

①逃げるかどうか ②どこに逃げるかは災害が起こる前に決められることである。

決めておくことで災害発生時にすぐに避難の「意思決定」をすることができる。

- 女川いのちの石碑プロジェクト

俳句の授業を機に様々なプロジェクトが生まれ、その一つが「女川いのちの石碑プロジェクト」

「千年後の人々に自分たちが経験した、とても辛く、悲しい想いを二度とさせたくない!!」と願い、「津波の被害を最小限にする3つの対策案」を考えた。

①「互いに絆を深める」②「高台に避難できる町づくり」③「記録に残す」

「記録に残す」の一つとして、女川町内にある21の全ての浜に津波が到達した地点よりも高い場所に石碑を建てた。

当時の生徒が石屋さんに頼みに行ったり、100円募金を行ったりした。協力してくれた石屋さんは生徒の姿勢に感動し、石代を無料にしてくれ、国内外のたくさんの協力で建設費用の1000万円の支援が集まる。

- 震災遺構が伝える教員の素晴らしさ

あの時子どもたちを救えたのは、教員しかいない。子どもたちを輝かせられるのは教員しかいない。

命を輝かせる・輝く命だから守る・きらきら輝く命だからこそ守ってあげる。

→命のことを広く、シンプルに丁寧に考えることが大切。

- 佐藤敏郎先生の講話の中で印象に残った言葉の紹介

- ・防災とはあの日を語ること、未来を語ること。黙っていれば嫌な思い出、話せば価値ある情報になる
- ・警報はゴング、すぐにファイティングポーズが取れる人はトレーニングしている人
- ・嫌な思い出は、話すことで価値のある情報になる
- ・山は命を救わない、人の行動があるからこそ、山によって救われる
- ・想定段階では、人ごとの想定ではなく自分が・大切な人がこの状況になると考えることが大切
- ・救って欲しかった命・救いたかった命は簡単に救える命
- ・災害は日常を襲う、奪う、二度と見られなくする

→講話の中でたくさんの言葉を聞くことができ、それぞれの言葉の背景を考えるとどれも大切な言葉で、後世に伝えていかなければならない言葉だと思う。次は自分たちが伝えていく番であることを強く感じた充実した時間になったと思う。

◇危機管理課へ最終提言

最後の活動として3日間で学んだことを南浜地区危機管理課へ最終提言を行った。

小学生チームからは、防災イベントで小中学生が防災グッズを配る、防災グッズの配達サービスや自動販売機を設置するなど防災グッズを身近にする案や防災についてもっと知りたいという思いから防災を科目にしてほしいという声が上がった。中には、寸劇で高齢者避難で活躍する小学生を演じ、小学生にもできることがあるからもっと頼ってほしいという子どもたちもいた。

中学生チームからは、SNSによる発信を市と一緒にいき、避難訓練の参加率が低いためお年寄りが来やすい避難訓練にし、避難訓練に参加した人が参加していない人を誘うようにする避難訓練を行いたいと言っていた。

高校生チームからは、健康診断やお祭りなど人が集まる機会に合わせて大人に向けての防災教育、防災と観光を組み合わせ淡路島をツアーしながら観光客に防災を伝える防災、震災時に学用品が不足していたことから特に学用品に着目した行政と企業間の救援物資の協定を結ぶなどの案が挙げられた。

大学生チームからは、地域の人々のつながりや総合防災訓練の参加率を上げるために学校・地域・企業がそれぞれの強みを活かし、総合防災訓練に取り組む、今回のフォーラムを継続しながらフォーラムで学んだ防災を大学生が全校で防災の出前授業をし、その拠点南あわじ市にするという案が挙げられた。

3. 総括

今回、このプロジェクトに参加したメンバーは311ゼミから志願した人たちであったが、各々普段の活動では学んだり感じたりすることができない貴重な体験ができたと思う。東日本を経験した我々と、南海トラフ地震を経験するかもしれない方々とお互いの経験や知識を共有し、生きるためにはどうすればよいかを深く考えられた3日間になったと思う。また、東日本と西日本で「防災」を通してつながりも生まれ、震災が生み出した人と人のつながりをもう一度考えさせられる機会になった。今回の経験を教員になる身として伝えていかなければならない責任を再認識することができる機会になり充実した時間を過ごすことができた。

4. 各自の感想

4年生 柴田 敬介

今回の南あわじ市ユース防災プロジェクトはとても充実した3日間になった。今までは、基本的には宮城教育大学の中で防災や東日本大震災について考えてきたが、今回は阪神淡路大震災や南海トラフ地震について、鳴門教育大学や兵庫教育大学、環境防災科がある舞子高校、淡路三原高校、鳴門渦潮高校、鳴門高校地元の小学生・中学生と一緒に学習することができた。一番嬉しかったことは自分達と同じような考え方や熱量をもった人たちと共に考えたり、行動したりできたことである。さらに、そこには大学生だけでなく小学生や中学生も真剣に防災について取り組んでいて、自分達が今までやってきた災害に対する意識に自信をもつことができた。今まで東日本大震災について学んできたことを他の教育大学や高校生、中学生、小学生に伝えた時も自分たちが思った以上に伝わっていて、「津波でんでんこ」や当時の人たちの声を届けた時もその後の学習に反映されていてこのプロジェクトに参加して伝承者として活躍することができたと思う。

また、今回の活動で得られたことは、南海トラフ地震の被害を受ける地域の人たちとのつながりである。活動していく中で大学生と高校生のような人と人とのつながり、地域ごとのつながりなど様々な場面で「つながり」の大切さに気付くことができた。被災した方々の講話でも最終的に救ってくれたのは地域住民の関係性や全国からの支援物資といった災害の時に生まれた「つながり」であって、その場合とは違う関係性になると思うが同じ教育大学に通い、命を守るための取り組みに全力で取り組んでいる仲間を得ることができたと思う。来年から教壇に立って子供たちに授業や日々の活動の中で物事を伝えていく立場になる。大学で学んだこと、311で学んだこと、今回のプロジェクトで学んだことをしっかり繋げていく事ができる「伝えるプロ」になれるように努力していき、自分が関わっていく子供たちをできるだけ今回のような幅広い年代が交流することで「つながり」が得られるような場所に連れて行ってあげたいと思う。

4年生 佐藤 夏美

今回のユース防災プロジェクトは、高校と大学、計5校が企画運営をする点が特徴的で、5つの学校それぞれが普段の学校での学びを今回のプロジェクトで参加者に還元していた。他の大学や高校の企画に参加してみて、自分に今までなかった視点（防災を楽しむ等）を得ることができたと感じる。宮教大としては、ワークショップや活動をする中での会話を通して、参加者に東日本大震災での出来事や教訓を伝えることで役割を果たせていたと思う。個人的には、今まで防災について学んできたことが自分の中で上手く繋がっておらず、自分の震災や防災に対する考えがまとまっていないと感じていたのだが、今回のような“伝える場”を通して知識や自分の考えが整理されていった。このことから、防災に関する知識のインプットだけでなく、アウトプットとしてその知識を教員としてどのように子供たちに伝えていくべきなのかを考え、そして今回のプロジェクトのように“実践”してみることの重要性を改めて実感した。また、防災を考えるうえで、子供の柔軟な発想力は時に大人を驚かせる。子供たちがのびのびと防災を学んだり、考えたりすることができるような環境を整えることが教員に求められていると感じた。

3年生 猪狩光希

三日間にわたる防災フォーラムに参加しての感想として、人との出会いは知識を増やすことや深めることにつながり、そのアップデートされた知識は他の人への思いやりにつながると感じる機会が多くあった。また、命を守ることに年齢の壁は無いということを学んだ。小学生・中学生・高校生・大学生・大人という幅広い年齢層が揃い、ともに活動していく中で、年齢関係なく全員が防災について熱量を持っている様子を目の当たりにした。そのような小中高生を見て、自分も既存のものに甘えてばかりではなく、自身で考え行動できる、行動していかななくてはいけないと思うようになった。自分がこれから行うことは、自分の防災知識を増やし、自分と出会う人々が防災・減災について熱心に取り組むきっかけを作りたいと思う。

3年生 小野崎彩菜

今回は、東日本大震災の被災地にある宮城教育大学の学生として、ユース防災プロジェクトに参加してきました。何か月前前から準備を重ねてきた4人のメンバーとは異なり、途中からグループに参加させていただいた立場ではありましたが、新たな学びや気づきで溢れた3泊4日でした。中でも、私がこの機会を通して得た大きなものは、兵庫教育大学、鳴門教育大学の学生とのつながりです。生まれ育った土地や環境は違えど、同じ教員を目指す立場として、防災について考える時間は大変貴重なものでした。南あわじ市の市長への提言を作成する活動では、南あわじ市の現状を踏まえながら、大学生メンバーと一つの案を練りました。自分では思いつかないような考えや視点に触れることができ、また、311ゼミ被災地実情班で東日本大震災の被災者のお話を聞いた経験を活かしながら取り組むことができたと感じます。このつながりを、阪神淡路大震災と東日本大震災の記憶の更なる伝承と、今後高い確率で発生すると言われている南海トラフ巨大地震の防災・減災に繋げていきたいと強く思います。

3年生 村上真綺

「住んでいる地域や年齢に関係なく学び楽しむことができた。」私はこのプロジェクトを通して、そのことが一番心に残った。普段交流しない地域の小学生、中高生、大学生と交流し、同じ問題に取り組んでいる仲間と出会えたことが、大きな収穫になったと感じている。私は、防災教育は東北が先進的である、東北と他の地方では意識の差があると思っていた節があった。しかし、他の地方と東北とでは毎日目にする震災関連の報道や副読本を用いた地域に根差した教育など取り巻く環境に違いがあるだけであり、人々の意識の差は自分が勝手に描いていたイメージであったことに私はようやく気付くことができた。

3日目、提言をまとめている小学生チームに行った時の会話が印象的であった。私が行った時、Sくんが1人で頭を悩ませ行き詰っている様子だった。その班の提言は『小中学生が休みの日に防災グッズを配るイベントを実施する』といった趣旨だった。私はその班のメンバーであるNくん「防災グッズ配る方法これ以外に思いつく？」と聞いてみた。するとNくんは「家に配ってまわるとか、自動販売機とか！」とすぐに答えた。続けてSくん「自動販売機やるんなら、売ってる防災リュックに入っていないものを自動販売機で売ったらええんちゃう？」と言った。「なんでそう思ったん？」と聞いてみるとSくんは「だって、リュックに入れるものは人それぞれ違うやろ？」と言った。この時のNくんの柔軟な発想力とSくんの学んだことを生かそうとする力が組み合わさり提言がより一層強くなった瞬間であった。このように、防災に取り組むことで一人一人の強みが発揮された瞬間がこの3日間で何度もあった。ここまで年齢関係なく、と言ったものの、小学生の力は凄まじいもので、たっぷりふざけて遊んでいる一方で、前述の会話のように大人には思いつかないアイデアをどんどん出してそれをそのまま形にしていた。その小学生の姿を見て中高生と大学生の背筋が伸びた。私は小学生にこんなにも刺激をもらうとは思ってもみなかった。

得たことは上記の通り、防災に取り組んでいる仲間が遠く離れた地域にもいること、防災について学びたいと思っている人がたくさんいることの2点である。

3年生 和田穂乃香

今回参加したプロジェクトでは、3つの教育大学と2つの高校が中心となって計画を立てたり、内容を考えたりした。その中で、これまで関わったことのなかった他の教育大学の学生とのつながりができたことが私にとってとても大きなことだったと感じている。東北には、宮城教育大学しか教育大学がないので、どこか孤独な感じがしていたが、同じように教師になるために頑張っている学生にあり、その人たちと防災について語り合ったり、問題点を話し合ったりする経験は私にとってとても大きな刺激となった。住んでいる地域が違っていると、防災に対する考え方や対処の仕方も少し変わっていてそれについて話し合う時間がとても貴重で楽しかった。また、今回のプロジェクトの参加者には、小学生から高校生の子供たちがいた。今回は、みんなが参加者ということも大きなポイントの一つだったので、大学生や高校生がお世話をするというのではなく、それぞれの学校種ごとに話し合い、刺激を受け合うという機会が多かった。大学生はそれなりに綺麗にまとめたり現実的な計画を作ったりしていたのに対し、小学生から出た意見はとても柔軟で大学生の中では話にも上がらなかった観点からの発表があったりして、とても面白かった。少し前まで教壇に経って教える立場だったので、同じ位の子どもたちの意見にあっとさせられるといういい経験をすることができ、子どもたちの意見はかなり突拍子もないことも多いが、問題の本質を捉えていて一番シンプルなのかも知れないと感じた。今回のプロジェクトを通して、離れた地域の同世代も頑張って防災について考えたり活動をしていることを知ることができ、とても刺激になったし、もっと頑張ろうと思った。また、小学生や中学生の意見に驚かされることも多く、貴重な経験をすることができた。次は、市長や教育長に提言したことを実現することができるように動いていく機会が得られればよいと思う。